

<書評と紹介> 村上直編 『近世高尾山史の研究』

筑紫, 敏夫

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

52

(開始ページ / Start Page)

102

(終了ページ / End Page)

105

(発行年 / Year)

1999-09-30

村上 直編

『近世高尾山史の研究』

筑紫 敏夫

日本近世史の分野で、戦後、活発になってきた動向の一つに、大学・大学院のゼミやサークルによる、個別の文書群、あるいは特定地域の文書群への集団的な調査・研究をあげることができている。それらの中から優れた集団的な研究成果も生み出されてきた。しかし、文書群の調査から研究成果の公表に至るまでを集団的に実践するには、長い年月とたいへんな労力を必要とするために、途絶した例も数多くあるのではないだろうか。ここに集団的な調査をふまえた、新たな集団研究の成果が登場した。村上直・法政大学名誉教授の編による『近世高尾山史の研究』が、それである。

本書は主として三つの章から成っており、その構成は以下の通りである。

刊行によせて

はじめに

高尾山薬王院文書について

第一章 高尾山信仰の展開

近世における高尾山信仰

大山隆玄

村上直

村上直

村上直

外山徹

—信仰形態の概観と信仰圏—

近世の開帳に関する一考察

—『高尾山薬王院文書』にみられる開帳記事を中心として—

江戸における高尾山薬王院信徒の実相について 實形裕介

高尾山信仰の興隆期と薬王院の動向 外山 徹

第二章 高尾山薬王院と諸寺院間の秩序

高尾山薬王院の談林再興と報恩講について 中島由美

近世寺院における門末秩序と地域の論理 吉岡 孝

高尾山薬王院と大覚寺門跡 岩橋清美

—地方寺院の門跡寺院院室兼帯の一事例—

第三章 高尾山と幕府・紀州藩 西沢淳男

高尾山薬王院領成立過程と朱印状交付について 安田寛子

高尾山薬王院と紀州藩 安田寛子

—薬王院文書の書簡と由緒書を中心に—

寺院文書にみられる近世民事訴訟の実態 古城正佳

—高尾山薬王院文書を中心に—

おわりに 村上直

以上のような論題を一瞥してもわかるように、本書は江戸時代の高尾山史に関する総合的な研究書と言ってよいであろう。その中心をなす十一本の論文の概要をまず紹介したい。

巻頭の「高尾山薬王院文書について」は、本書の総論的な位置を占める論稿である。ここでは、薬王院文書の江戸時代以来の調査・整理、研究の歴史を要領よく概観し、編者を中心とする法政

大学高尾山薬王院文書調査団の調査・研究の意義を述べている。さらに史料集『高尾山薬王院文書』全三巻に収録された史料を中心に解説を加えている。

第一章の「高尾山信仰の展開」には四本の論文が収められている。まず、「近世における高尾山信仰」では、薬王院文書とその他の文献資料を使って、前半では近世初期から後期までの信仰形態の歴史的な展開をたどる。後半では、関東地方を中心とする信仰圏の広がりとその構造について述べ、「武蔵名勝図会」や高尾山直下の村役人層の日記など、史料を駆使して叙述している。さらに信仰圏の伸長にあたって、日護摩講の講員間に「取次」というシステムが形成されていたと指摘する。

「近世の開帳に関する一考察」では、薬王院文書にみられる開帳の記事を分析している。そして、薬王院が、寺格の上で田舎本寺という中間的な存在であったことに注目し、幕府の寺院政策―薬王院―江戸の民衆という諸関係をとらえることを課題に設定する。検討の結果、戦国期から十八世紀中頃までの開帳が、初めは後北条氏の保護下にあり、近世に入っても観音信仰に基づき正確に三十三年間隔で実施されており、このことが、元禄期以降の江戸出開帳増加に伴う、実施間隔の許可基準設定の根拠となったとする。また、宝暦期以降、開帳の運営主体である江戸の町人らは、民間宗教者として有名であった足袋屋清八を介在させることで薬王院との関係を深めたことなどを指摘している。

「江戸における高尾山薬王院信徒の実相について」は、文化六年（一八〇九）の「江戸田舎日護摩講中元帳」を主に分析して、

薬王院の江戸在住の信徒の実態を提示する。ここでは、武家では御三家クラスから小禄の御家人まで、町人では有力問屋商人から下層町人までというように幅広い階層への信仰の浸透を指摘している。また、薬王院は広範な信徒を獲得するために、多様な現世利益を提示したが、本稿では「火消」信仰について考察している。

「高尾山信仰の興隆期と薬王院の動向」では、近世において高尾山信仰の発展を担った薬王院の動向に注目する。まず、幕府の所在地であり、人口の集中した巨大都市であった、江戸と薬王院との関係を見るために、御札の配布、講中の動向、薬王院貫主の江戸滞在中の動静を検討する。さらに、近世後期に高尾山が信仰の場としてだけでなく、「名所」としての性格を強めたことを蛇滝の開発などを事例に紹介している。

第二章の「高尾山薬王院と諸寺院間の秩序」には、三本の論文が収録されている。まず、「高尾山薬王院の談林再興と報恩講について」では、初めに新義真言宗の談林（僧侶の教育機関）が制度化されてゆく過程を概観し、元禄十五年（一七〇二）の薬王院の談林再興と僧侶、隆光の権勢の強まりとの関連を記している。さらに、薬王院の住職資格制度である報恩講に僧侶の出席が減ったために論争が成立しない状況となり、改革の必要に迫られていたとする。そのため薬王院は修行年数、色衣免許などの点で末寺に便宜を図っていたことなどを指摘している。

「近世寺院における門末秩序と地域の論理」は、近世の本寺・末寺制度が強固な支配性をもつという説を批判し、薬王院の末寺

・門徒組織（門末）を事例に、「地域の論理」を吸い上げてゆく田舎本寺の有様を検討する。まず、葉王院の門末組織を概観し、門末秩序の編成のされ方をみるために門徒から末寺への昇格の事例を分析する。その結果、地域社会における昇格運動が背景にあることを指摘する。さらに、地域の要望としての村芝居興行を寺院が援助してゆく過程を検討し、近世の寺院体制は「地域の論理」を取り込んでゆく機能を制度として有していたと、新鮮な提起をしている。

「高尾山葉王院と大覚寺門跡」は、明和五年（一七六八）に葉王院が大覚寺の院室の一つである方廣院院主を兼帯したことを中心に分析し、葉王院と大覚寺との関係、及び門跡寺院院主兼帯の実態を提示した意欲作である。ここでは、院室永代兼帯は、葉王院にとっては、新たな権威を取り込んで寺格の上昇をはかることにつながり、一方で大覚寺にとっては、地方の寺院に接触して財政問題を解決し、自己の権威を関東の寺院に浸透させることに有効であったとする。さらに院室兼帯により葉王院は、門主の相続や年頭御礼などの儀礼を通じて大覚寺との関係を形成し、そのために触頭の江戸四箇寺を介在させることが弱まり、門跡寺院と地方寺院（葉王院）とが直接、関係を取り結ぶようになったと指摘している。

第三章の「高尾山と幕府・紀州藩」には、三本の論文が収められている。「高尾山葉王院領成立過程と朱印状交付について」では、寺領の成立と発給された朱印状を分析する。その結果、葉王院は、初め後北条氏の、ついで代官頭大久保長安の保護をうけ

た。しかし、長安の失脚と幕府の寺院政策により寺領が半減する。また、朱印状の書式は、慶安期には本末ではっきりとしたちがいがあったが、以降は薄礼化されて、貞享の朱印状では書式のちがいがなくなるものの、文言上では葉王院の本寺としての寺格は保たれたとする。さらに、朱印状の交付出願を検討することで、近年の幕政史上の慶安期のとらえ方をめぐる議論に問題提起をしている。

「高尾山葉王院と紀州藩」は、葉王院文書の書簡や由緒書を比較検討することで、近世中期頃からの葉王院と紀州藩との関係を考察したものである。ここでは、葉王院は御三家の紀州藩の権威を背景に布教を有利に行おうとしたと指摘する。また、葉王院は、紀州藩との関係を記した由緒書を少なくとも四回作成し、同藩との関係の維持や諸願を有利に展開させようとした。そして、社会の変化にともない、葉王院が同藩との結びつきをより重視することになり、そのために由緒の内容が一層、強調されるようになったとしている。

「寺院文書にみられる近世民事訴訟の実態」では、訴訟過程の実態も記されるとみられる地方文書や寺院文書を対象にして、近世の訴訟制度を検討する。具体的には、葉王院と近隣の村々との山論を分析しながら、訴訟制度成立期の過渡的事例や幕府機構内の訴訟管轄区分、内済時の扱人の実態などを紹介している。

以上、十一本の論文の概要を紹介してきた。多くの執筆者による論文集にはよくあることだが、若干の形式上の不統一がみられ

る。しかしながら、全体的にみるならば、膨大な薬王院文書を主な対象とする、総合的・多面的な論文集としては成功していると言っただけであらう。小稿では、個々の論文の熟成度の深淺以上に、本書の刊行に至るまでの経過を深く見つめたいと思う。

大山隆玄氏の「刊行によせて」、村上直氏の「はじめに」・「高尾山薬王院文書について」・「おわりに」によると、刊行までの経緯はおおよそ次の通りである。薬王院文書は、近世の地誌類などを通じて、ごく一部が公になっていたにすぎなかった。その後、一九六〇年度に東京都教育委員会が「浅川流域文化財総合調査」を実施し、これによって同文書群の概要が把握されることになった。さらに一九七八年に薬王院から『武州高尾山史料集』（村上直・北原進編）が刊行され、ここには六十点近くの貴重な文書が収録された。

このような前提をふまえて、薬王院文書の全面的な調査が開始されたのは一九八六年のことであった。この年、村上直氏を团长とする法政大学高尾山薬王院文書調査団が結成され、文学部史学科の卒業生や近世史ゼミの院生・学生によって、整理・分類作業が行われた。その成果は、はやくも翌八七年に「高尾山薬王院文書目録」として刊行され、八八年作成の「目録補遺」を含めて二千六百点近い文書の全容が明らかになったのである。さらに調査団では、特に重要と思われる文書を史料集として刊行することにし、収録文書の選定と解説作業を進め、一九九二年までに「高尾山薬王院文書』全三巻（法政大学多摩図書館地方資料室委員会編）の刊行を終了した。

本書巻末の「高尾山史に関する研究一覽」によれば、史料集完結後、時を移さず、近世史ゼミの院生によって、ゼミでの研究発表とそれをうけた討論が組織され、合わせて三十六回に及んだという。また、院生の多くが薬王院文書を使って、さまざまな研究会で報告・発表を行い、さらに学会誌などに論文を執筆するなど旺盛な研究活動を展開している。このような集団的研究、及び個人研究の豊かな蓄積の上に本書は刊行されるに至った。調査団の結成から十二年目のことである。

以上のような刊行までの経緯をみると、膨大な量の貴重な文書群に対して、調査、目録作成、史料集編纂、研究活動が、すべて集団的に行われ、最上の成果として本書に結実していることがよくわかる。長期間の全過程にわたって指導にあたられた村上直氏はもちろん、執筆者・調査団・ゼミ生など関係者の方々の努力に対して敬意を表したい。同時に、このような貴重な研究成果が刊行され、歴史学会の共有財産になったことを慶びたいと思う。

（一九九八年十月刊 A5判 三二五頁 六八〇〇円（税別）
名著出版刊）